

〔資料〕

S・エジセルのヴェブレン論

Stephen Edgell <Thorstein Veblen's Theory
of Evolutionary Change > in American Journal
of Economics and Sociology, July, 1975, 34 (3)
pp. 267-280

佐々野 謙 治

(1)

一般にアメリカ制度学派の創始者と呼ばれるソースタイン・ヴェブレン(1857-1929)については、実に種々な評価がなされてきた。「あえてある程度の個性を無視する危険を冒して単純化」して大別したとしても、中山氏によると、従来のヴェブレンに対する評価には、「第一に、正統派マルクス主義者に見られるように、ヴェブレンの立場をプルードン、ヘンリー・ジュージ流のプチ・ブル的社会改良主義者とみなすもの、第二に、マルクス主義的な科学的社会主義者との相違点を強調しながらも、アメリカ資本主義の現実を鋭く洞察し批判した社会主義的思想家とみなすもの、第三に、J・R・コモンズ、W・C・ミッチェル、J・M・クラークに至るいわゆる<制度学派の創始者と評価するもの、第四に、新ヴェブレン主義者といわれるニュー・ディルの社会改良主義の源泉であるとみなすもの、第五に……現代における制度派経営学の発展や<経営者革命>論にみられる Managerialism の先駆であると主張するもの、第六に……技術主義による社会改良を意図したテクノクラシー運動の先駆者の地位に権威づけようとするもの、第七に……金ピカ時代の独占の浪費性を能率という観点から批判した保守的批判家にすぎなかったとするもの、最後にヴェブレンの多面的才能を認めながらも、

その独創性を否定し、偏倚狹介な懷疑主義者、皮肉屋、偶像破壊主義者であるにすぎないという保守的立場からの見解がある」（中山大『ヴェブレンの人と思想』ミネルバ書房、1974、283－284頁）。

従って、ヴェブレンに対する評価はもちろん、彼が社会科学にたいしてなした貢献についても、今まだ統一の見解は見い出されていない、というのが実情なのである。その原因が、ヴェブレンの思想それ自体がもつ多面性にあることももちろんだが、またヴェブレンの思想を、その全体性において検討することをおこたり、一面的に個々の見地からのみ検討し評価してきたことにあったことも、否めない。小稿において、一つの資料として紹介を試みる上掲のS・エジェルの近年の論文・「ソースタイン・ヴェブレンの進化論的变化に関する理論」は、かかる点において、一つの示唆に富む論点を提示している。エジェルは、ヴェブレンを「マクロ経済社会学者」と規定し、ここにこそ、ヴェブレン独自の社会科学への貢献も見い出されるべきだ、と主張する。かくして、ヴェブレンの思想を、何よりその全体性において評価すべく、彼の「進化論的变化に関する理論」を再構成しようと努めている。以下、出来るだけエジェルの立論に即して、上掲論文の概要を見てみたい。

(2)

ソースタイン・ヴェブレンの社会学への貢献、とりわけ彼の進化論的变化に関する理論は、最も誤伝されかつ過小に評価されてきたものに属する。ほとんどの社会学者達が、ヴェブレンを無視してきたのである。「ヴェブレンの世代のいかなる社会学者といえ、彼ほどその言葉が引用されながら、その作品が読まれなかった者はいない」（バンクス）。それには種々の理由をあげることが出来る。中でも、「ヴェブレンの貢献が独立の学科としての経済学と社会学の対抗的主張の一戦場となってきた」ことが、彼の社会思想全体の再評価を遅らせる障害となった、とエジェルは言う。「ヴェブレンは、社会学者によっては経済学者として、経済学者によっては社会学者として分類されがちであった」（マーチンデール）。果してヴェブレンは、「経済現象を社会現象と考え、かくして、各々の型の経済システムは社会の一特殊形態である」と解したのである。とすれば、この「ヴェ

ブレンによって始められた二つの主題を統合する」ということ — 経済社会学の樹立 — こそ、後の人々が追求すべき課題であるといえよう。しかるに、「批判家達は、ただヴェブレンの貢献をあれこれの点から検討するという事に固執してきた」のみならず、「この傾向を一層押し進め、ついには経済社会学の可能性を否定した」とエジェルは言う。

要するに、エジェルによると、「ほとんどのヴェブレンの批判家達は、これまで彼の貢献の全体性を理解することに失敗してきた」のであり、同時にまた、個々のあれこれの観点からなされた「ヴェブレンの作品解釈のもつ限定された相矛盾する指針が、彼の全体的貢献の有する独創性を認識することを遅らせてきた」のである。かくしてエジェルは自らの当論文の主要関心についてこう言う。「何がヴェブレンの学問の核心を成すかを問うこと、それは彼のマクロ経済社会学の中に求められるべきだということ、またこの貢献はこれまで一般に認識されることのなかった深い統一を含んでいるということを示唆することである」と。

まずエジェルは、ヴェブレンがそのマクロ経済社会学を形成するにあたって、彼に影響を与えた学者として、ヘーゲル — マルクス、E・ベラミー、ダーウィン及びシュペンサーに言及する。すなわち、カント哲学と古典派経済学の批判をもって出発したヴェブレンは、「彼がマルクスの〈急進的ロマンティシズム〉と呼んだヘーゲルの公準をも拒否した。しかし、彼の社会科学へのアプローチは、かなり唯物論的枠組に依拠している……ベラミーの私的所有制の〈愚さ〉〈誤った方向〉及び〈浪費性〉への攻撃は、ヴェブレンによって、その多くの作品中で繰り返された……ダーウィンやシュペンサーの影響は、ヴェブレンの進化論的理論やその志向及び科学的研究についての彼の着想からして明らかだと言える」。

こうした学者の観念（アイディア）にその基礎を与えられたと言われるヴェブレン独自の全体的貢献は、方法論に関するものを除けば、何より「労働、所有権及び婦人の地位に関する論文に始まる」とエジェルは言う。1898年に、続けて執筆された三つの論文、〈The Instinct of Workmanship and Irksomeness of Labour〉〈The Beginning of Ownership〉及び〈The Barbarian Status of Woman〉が、それである。これらの諸論文は、「萌芽的な形で、ヴェブレンの重要な理論的観念の多くを含んでおり、彼の持続的な本質的関心となるであろう

ところのものを匂わせている。」エッセルがその三つのヴェブレンの初期論文に注目する所以である。

ヴェブレンは、そこで「＜単に適当な諸力の衝撃を通して快苦を蒙むるというのではなく、何かをなすこと……むしろ展開する行動における首尾一貫した諸性向の構成物、というのが人間の特徴である＞と考え……その人間性の隔世遺伝的局面を指し示す＜製作本能＞という用語を導入」した。そして「この性向を、本質的に＜目的ある活動への一性向……その力によって生活や活動の無益なもののすべてが嫌悪される一つの目的ある意識＞と規定した。ヴェブレンはこう主張した。製作本能は、＜人間性の一般的特徴＞であり、＜人間生活を、人間が物的諸物を利用する場合に導く行為の一般化した規範＞であり、従ってそれは、＜経済生活過程の理論と呼ばれる資格のあるものには、どの科学にとっても、その出発点として役立ち、またその指導原理を提供するものにちがいない＞と。これがヴェブレン生涯の研究の主要仮説であり課題なのである。これがまた、ヴェブレンは経済ないし技術決定論であったといわれる疑わしい批判の一つの源でもある」

かく述べてエッセルは、ここに、ヴェブレン生涯の研究課題とその基本視角ともいべきものを、確認するのである。つまり「経済生活過程の理論」— エッセルの経済社会の「進化論的变化に関する理論」—、これを構築することがヴェブレン生涯の研究課題なのであり、その彼の出発点ないし指導原理が、上述の内容をもつ「製作本能」という概念なのである。従ってそれは、経済社会の進化についての分析はもちろん、その社会そのものについてのヴェブレンの評価基準ともなる重要な概念なのである。

ヴェブレンの上掲諸論文は、後の彼の思想を見る上で見逃せない重要な論点が示されている。しかし、それらの諸論文が、エッセルにとってもつ意義は、「それらが包み有する理論の詳かな点にあるのではなく、それらが導入しているテーマであり、その論義の方法なのである。」 エッセルは言う。そのヴェブレンの「各論文において、特殊の経済現象は、進化論的理論と方法の助力をもって検討されているのである」と。

さて、そこでの「ヴェブレンの分析様式は」エッセルによると「次の仮説を含んでいる。生産は協同によって助長され＜製作本能＞によって動機づけられる—

つの社会的活動であり、更に技術の知識は累積的である、というのがそれである。しかしながら、その生産の社会的性質及び集団の生存の優位性にもかかわらず、製作本能の発現は、ある一つの歴史的に支配的な経済的及び文化的な諸条件によって変化するのである。」とすれば次に、何故如何にして、その「製作本能」の発現がある時代に支配的な経済的及び文化的諸条件によって変化するのかが、問われなければならないであろう。実は、この変化の過程を各歴史の段階ごとに解明 — この過程の解明にヴェブレンは後に見るように「習慣」及び「制度」という概念を導入する — したものが、ヴェブレンの進化論的变化に関する理論の内容をなすのである。

とまれ、ここではヴェブレンは、それを二つの基本的な進化の段階において検討する。さしあたり重要なのは、平和的条件から略奪的なそれ — 後者はのちにヴェブレンによって三つの段階へ区別される — への推移である、と言うエジェルの、ヴェブレンのそれについての説明をこう要約する。「略奪への推移は、技術の改善の結果生じるところの剰余物の産出によってもたらされる。その上、この進化論的变化は所有権の始まり及び私有財産制度の開始とも相関しており、これらの諸要因の歴史的連鎖が主たる刺激となり製作者気質を基礎とした競争を搾取を基礎とした競争へと転換させた」と。続けてエジェルは言う。「それに対応して、略奪文化の一層の発達は、社会に産業的職業と金銭的職業との区別を出現せしめたが、それには、搾取を名誉とし労働を不名誉とする倫理基準が伴っていた。（かかる状況が製作本能の発現に阻止的に作用するのだが、佐々野）これらの経済的及び文化的諸変化の含みもつ意味を、ヴェブレンは、社会における労働及び婦人の位置や役割と、また所有権の起源と関連づけて、各歴史の段階ごとに探究した。こうして暫定的な一般理論は明らかにされ、それが特殊の経済現象へ応用される」と。

ここに既に、エジェルによると、ヴェブレンの経済社会学者としての志向とともに、彼の経済社会の進化に関する理論の基本的テーマが確定されたことになる。すなわち、ヴェブレンの進化論的变化についての理論は、折々の経済的・文化的条件の変化につれて製作本能の発現が促進あるいは阻止されるということに注目し、そこから経済的・文化的状況の変化の意味を明らかにすべく、各歴史社会の

進化の過程を解明していく、というのがそれである。なお、上掲諸論文において、ヴェブレンは「彼自身の方法論的論議を社会変化に関する特定の諸局面及び経済的分業についての分析と関連づけて追求していく過程で、彼の後の研究の中心的テーマの大半をほのめかしているのである。」すなわち、「産業的諸活動や利害と金銭的それとの対立、文化的ラグの構造的問題、有閑階級の起源やその持続的効果、好戦的文化の場合の愛国心の喚起、過去の古い慣行によって与えられる既得権の合法性」というのがそれである、とエッセルは言う。

(3)

こうして、ヴェブレンの初期諸論文に見てきた彼の「マクロ経済社会学についての予備的概要においては、二つの関連した水準の理論が、暗黙のうちに区別されていた。つまり、一方でのヴェブレンの一般的進化論的理論と、他方での選ばれた諸現象に関する特殊理論とが、それである……後者は余りにもしばしば前者と無関係に検討されてきたが、ヴェブレンの特殊理論に形を与えているのは、彼のその一般理論なのである。かく言うエッセルは、ここに、ヴェブレンがマルクス経済学についてなした論議を引用する。すなわち「<体系のどの部分、学説のどの一論説を取り上げて見ても、それは、全体の中の部分としてでなければ、また全体の出発点と統制規準とを与える先入主と仮定とに照合することなくしては、正しく理解もされなければ、批判もされないし、また擁護もされない>」というのがそれである。続けてエッセルは言う。確かに「ヴェブレンは、絶えず生産、消費、及び競争のような特殊現象を探求したのだが、彼は、それらに関する諸理論を常に彼の一般的進化論的变化に関する理論とのコンテクストの中で発展させた。換言すれば、ヴェブレンは、理論においても実際においても、社会及び経済生活の特殊諸現象を孤立させて論議することを、益のない本質的に<非科学的>なことだとみなしたのである」と。

とすれば、ヴェブレンの思想の正しい理解のためには、何よりその一般理論、つまり進化論的变化に関する理論こそ解明されなければならないことになる。かくして始めて、特殊理論 — エッセルのいうヴェブレンの経済現象について解明 — への正しい理解も可能となるからである。これまでのエッセルの立論は、ヴ

ェブレンのその進化論的変化に関する理論を見ていくための準備作業であったわけである。なおエジェルの、ヴェブレン学問の核心及びその貢献は、彼の「マクロ経済社会学」のうちこそ捜し求められるべきだと言ったのも、実は、この一般理論を指してのことであったと解することが出来よう。

そのヴェブレンの進化論的変化に関する理論は、エジェルによると、いわゆるヴェブレンの三部作と一般に呼ばれている〈Theory of Leisure Class, 1899〉〈The Theory of Business Enterprise, 1904〉及び〈Instinct of Workmanship and the State of Industrial Arts, 1914〉に、最もよく示されている。これらの諸著書において、ヴェブレンにより「苦心してつくり上げられたモデルは、〈本能〉〈習慣〉及び〈制度〉に加えて、進化の段階についての拡大版を含んでいた。」そこでエジェルは、ヴェブレンの進化論的変化に関する理論を整理するに先立って、上掲諸概念の立ち入った検討を試る。

その諸概念のうちでも、とりわけ本能と進化主義への批判が強かった、とエジェルは言う。つまり「進化主義も本能論のいずれも、ヴェブレン思想の真の基礎とは関係がない。というのは、人はその両方がなくてもまにあうし、それでも彼の言いたかったことのすべてを言えるからである」（マーチンディール）。「ヴェブレンの進化の諸段階についての理論は古物博物館へ追放されてもしかるべきものである」（コーサー）。また「ヴェブレンは本能と向性との区別をその相違の説明なしに示した」（デイヴィス）言々というのがそれである。だがエジェルによると、これらの批判は、ヴェブレン思想への一つの誤解に発するものなのである。最初の二つの解釈は、エジェルの当論文というヴェブレンの「理論化の二つの水準に照らして見る時、疑わしいもの」となる。エジェルによると、これまで見てきたように本能論も進化主義も、ヴェブレンの進化論的変化に関する一般理論の構築にとってはきわめて重要なものであったし、その一般理論が特殊理論に形を与えているのであり、従って、この特殊理論の解釈も、一般理論に照らして初めて正しくなされるものであったからである。最後のデイヴィスのそれは明らかに誤りである。というのは、「ヴェブレンは、本能は〈意識と意図された目的への適応を含んでいる〉のに向性的行為は非目的論的で知性によって導かれることがない、と論じているからである。」もっとも、ヴェブレンが本能という用

語を使用するのは、それに代る適切な名称がないからなのであり、ヴェブレン自身、その用語の使用に余り気のりしていない — それは、ヴェブレンが「多くの同意語、つまり〈遺伝的資質〉〈内的に一貫した人間性向〉〈性癖〉〈精神的生来の特質〉」等を用いていることに示されている — ことは事実であるが。

さて、「ヴェブレンは数多くの本能についてのリストをつくってはいるが、それらの多くは〈相互に補強しあう〉もので、それ故、その効果においてそれらを分割することは難しいことを示唆している。」だが基本的には、それらの本能は二つの群、特に製作本能と収奪・略奪本能に還元することが出来るのであり、またそうすることが望ましい、とエッセルは考える。そして言う。「製作者気質は〈生活目的にとっての有用性……技術の効率や発達〉を志向する。しかるに略奪は、〈プラグマティックな私利や私欲〉に係わりあい、〈搾取を含む〉のである。」ヴェブレンによると、「略奪も本能として類別されるべきものであって、その本能が略奪の習慣や制度を結果として生じせしめるのである」と。

更にエッセルは習慣及び制度概念に言及する。「ヴェブレン自らが設定した課題は、本能が〈文化成長において効き目を現す〉やり方を探求することであった。〈すべて本能的行為は展開し、そして習慣による修正を受ける〉という前提から出発して、ヴェブレンは、〈習慣〉及び〈制度〉という用語を導入する。それは、製作本能と略奪本能が、ある一つの文化的状況において、発現を競う過程を理解するためであった。〈生活習慣〉という用語は、特定の経済的諸条件の当然の結果として生じる思考や行為の様式を示すもので、かかるものとして習慣は、本能的性向を反映もすれば、それを限定もするのである。習慣的思考や行為が確立されて長期に及ぶ類型（パターン）となると、ヴェブレンは、それを制度と呼ぶ。従って習慣も制度も、ともに文化の異なっているが関連した局面をあらわし、次には、それらは支配的な物的諸条件によって条件づけられる。」

このエッセルの言及を、ここで若干敷衍して見てみよう。ヴェブレンは、本能を動因とする人間行為が慣習化されて一定の持続性をもつようになったもの、それを制度と解する。故に、この習慣つまりは制度が本能の発現を規定していると言うのである。先にヴェブレンが本能の発現が経済的文化的条件の変化につれて変ることに注目していることを見たが、この変化は、習慣や制度 — この総体が

経済的文化的条件を規定し、一つの歴史的経済社会を構成する — の変化によってもたらされるわけである。すなわち、収奪か製作本能・不変でいずこにも存在するものと解されるその本能・のいずれを強く発現せしめるかは、各時代に支配的な歴史的に変化する習慣や制度によって規定される、とヴェブレンは考える。そしてこの制度は物質的諸条件、要するに技術によって条件づけられていると云うのであるから、その制度の変化は、技術の変化・発展 — これはヴェブレンによれば自動的に自己目的として遂行されると解される — によってもたらされることになる。ではいかにしてか — 。技術の発展は新しい物質的環境をつくり出す。人間は、この物質的環境に適応すべく、新しい習慣つまり制度を生み出す。換言すれば、この新しい制度をもって新しい物質的環境へ適応すべく努めるわけである。かくして、いずれこの新しい制度が古いものにとって代る。つまり制度の変化が生じる。この過程がヴェブレンのいう経済社会の進化なのである。

その進化は旧来の制度と新しい制度の相克のうちに進展する。この点をエッセルは、次のように述べている。ヴェブレンは、制度の起源を「特定の物的諸条件のコンテクストの中にある習慣に、そして究極的には本能に帰している」と言えるのだが、「制度は一たび確立されるやそれ自体の自動性を保持し発展することが出来るのである」従って、「ある時代に現出した制度は後の時代にまで残存し、その結果として生じる文化的ラグは新しい物質的諸条件によって一般化される思考習慣とより以前の文化発展の時期に一層適応していたその習慣や制度との間に<軋轢>を引き起す傾向を有する。この<軋轢>つまり新旧の制度間の矛盾・対立・相克を契機として、経済社会の進化が生じるのである。ここに、ヴェブレンの進化論的变化に関する理論を構築する骨組が完成された、と言えるだろう。要するに、上に見てきた技術・本能・習慣及び制度という諸要素の歴史的相互作用を解明することによって、ヴェブレンは、経済社会の進化を各歴史の段階ごとに説明していくのである。

(4)

技術、本能、習慣及び制度の歴史的相互作用を、ヴェブレンは、平和な未開時代、野蛮時代、手工業時代及び機械時代という四つの進化の段階に関連づけて検

討する。こうして展開される進化論的变化に関する理論の中心主題 — この点既に確認済みと言えるのだが — を、エジェルは、こう述べる。「ある環境は、究極的には製作本能や略奪本能に由来する思考や行為の発現にとって、他のそれよりも有利であるということである。これらの二つの本能は同時にどこにでも存在するのであるが、それらの発現と影響は、ある一つの集団あるいは社会の物質的諸条件やそれらに特有の規定的心理傾向に応じて変化する」と。以下、エジェルは、進化論的变化に関する理論の概要を積極的に整序し検討することによって、ヴェブレンが社会科学に対してなした独自の貢献の所在を、つきとめるのである。

平和な時代にあっては「〈産業技術の状態〉が文化組織の支配的要因である。技術の水準の低さが〈戦い奪うに値する余剰〉を排除しているし、集団の生存がそれに依存する製作者気質が、その時代の文化生活を形成する主要力として支配的なのである……集団のすべての構成員が技術的知識に〈自由に接近でき〉るので、その発現がほとんど妨げられない。「生存への没頭が略奪を阻んでおり、そのような状況下では、製作者気質が平和な時代の集団の支配的な志向となる。」

だが技術的知識の水準の向上は、従ってそれがもたらす余剰産物は、平和な未開時代を終らせ、やがて略奪・野蛮時代をもたらす。すなわち「〈産業の方法が、戦い奪うに値するマージンを残す程に、つまり生計をたてることに従事している人々の生存費以上のものを残す程に発達させられた場合に、初めてそうなる。従って、平和から略奪への推移は、技術的知識と道具の使用の発達に依存している〉のである。」その変化・推移は漸進的であり、技術進歩がもたらす物質的諸条件が略奪の発展に有利となる時、その習慣や制度が、製作者気質に基づく習慣や制度にとって代り、かくしてヴェブレンの野蛮時代が現出するわけである。

見られるように「ヴェブレンは技術に動的優位性を与えているのだが、特にその反応の連鎖の当初においてそうだと言えるのだが、しかしそれは排他的にその原因となる影響力をもつものではない。ヴェブレンは進化の単線の理論には同意しない」のである。エジェルが、既に見たように、ヴェブレンを技術決定論者という評価に、組しない所以である。「その歴史的变化に関する複線の見地に照応して、ヴェブレンは、野蛮時代をもたらす諸力が〈どの例においても同じだということをはめつたにない〉ということを観察している」とエジェルは言う。何故か

一。ヴェブレンによれば、技術の進歩も、またそれに係わる「＜物質的諸状況及びこの状況に巻き込まれる人間素材も、若干のあるいはすべての例において全く同じことはない故に、そうなのであり、いずれの場合であれ、制度の成長を強制して特定の典型的な形態をとらせる、あるいは特定の典型的帰結に従わせるような事物の強圧的正常なコースはない＞からである。」

とまれ「略奪文化の支配は余剰物の産出によって促進される。今や個人的に財産を所有することが有利となって、その結果、製作者気質は減退する。略奪や武勇に基づく新しい価値体系が、今やうすれつつある製作者的性向、その習慣及び制度にとって代る。」この略奪文化がある一つの集団や社会を支配する程度は、等しく野蛮時代にあっても、種々である。特に征服に基礎を置く社会においては、その度合が強く、ここでの習慣や制度は、ヴェブレンによれば、常態以上に差別的な感情を促進し、ここでの生活規律は、製作者気質の発現を強く圧する。

野蛮時代に続くのは半平和的の手工業の時代であり、その間は、「略奪文化の強圧的支配は＜折衷的規律や所有権に具体化された緩和された自己増強のもとに＞減少する……＜手工業システムのもとでは……製作本能が、再び、日常生活の規律をつくりあげる諸要素の中でも、支配的な位置につくようになって、その特徴的傾向を人間の思考習慣に与える＞ようになる。」かくして、生産が増大され富の蓄積が加速化される。相対的に平和を享受してきたイギリスにおいて特にそうなのだが、「製作者気質の拡大とその浸透は、生産と交易の、従って人口の増大を結果的に生じさせた。創造的製作者気質によって促進される生活の規律は、機械的、非人格的因果概念を引き起し、従って特に技術に係わる科学、例えば、物質的科学的の発達に影響を及ぼす。しかしながら、技術の規模とその費用が増大するにつれて、大量の資本が生産を組織するのに要求される。と同時に、それに照応する交易の発達は、＜価格システムが前景へ出てくる＞市場関係の重要性を増大せしめることになる。こうして産業的職業と金銭的職業の間に漸進的な分離・分化が手工業時代の末期から生じる。」いわゆるヴェブレンの「産業」と「企業」の分化である。

かつて生計の資を得るために営まれていた産業・事業が、今や企業人により、利潤つまり金銭的利益の獲得を目指して経営され始める。ここに言う産業とは機

械化された近代産業に他ならない。ヴェブレンの「機械時代」、つまり資本主義 — 企業による産業の支配体制 — の出現である。エッセルは、その「近代産業資本主義についてのヴェブレンの研究の主たる焦点は、その矛盾にある」と言う。

機械時代にあつては、「産業生産の規模、複雑さ及びその費用は、それを所有する人々による指導と支配にまかされる。所有者＝労働者が生産過程を個人的に監督し規制していた手工業時代とは対照的に、機械時代にあつては、生産の金銭的側面が、企業人にとっての主要関心となる。」 かつて手工業時代に「訓練された個々人の技巧、創造及び応用を基準に考えられていた」産業・生産が今や、「投資に基づく利潤目あてに組織されるようになり、貨幣を基準として計量されるようになる。有用性、つまり製作者気質の目的は利潤をあげる要求に従属させられる。」 企業人は、金銭的利潤の獲得のためには、「生産のサボタージュ」つまり生産の制限をも辞さない。すなわち、生産の増大が金銭利潤の増大と結びつかなくなるや — この点エッセルは必ずしも明確にしているわけではないが、ヴェブレンにあつては、それは自由競争・産業資本主義末期に現出すると解されている — 、企業人は、生産サボタージュをもって利潤獲得とその増大に努めるようになる。それを契機に、今や、手工業時代末期以来分化し始めていた産業と企業との間に対立・矛盾が生じる。かくしてここに再び製作本能の発現は阻止ないし拒否されざるをえなくなる。

その生産サボタージュをも辞さない企業人 — その行為は機械時代以前の自然法哲学によって正当化される — による近代産業の運営には、ヴェブレンによると、(a)資源の不利用(b)販売術(c)過剰生産及び(d)体系的生産混乱はさけられない。これがヴェブレンの近代資本主義に対する批判なのである。もっともかくヴェブレンが批判する資本主義とは、独占段階に至つてのそれなのだが、エッセルにはこの認識は欠落している。

とまれ、ヴェブレンの機械時代、つまり近代産業資本主義についての批判的分析は、「更に拡大されて、法律、政治及び教育の領域にまで及ぶ」のである。エッセルは、ここに言う「ヴェブレンの貢献のクライマックスは、彼が企業と産業の習慣や制度間の矛盾に帰因させた機械時代の製作者気質の拒否から、社会的・経済的及び政治的諸分枝を理解しようとの関心にあつた。ヴェブレンは何より、マ

ルクスやヴェバーと並ぶ、近代産業資本主義に関する社会理論家である」と。

ところで、上述の矛盾をもつ近代産業資本主義を、ヴェブレンは「浪費的で不適切、かつ究極的には移りいくものであるとみなすのだが、彼は、この近代産業資本主義がその持続性に依存している機械システムが有する侵蝕性という文化的効果を基準として、かくみなすのである。」従って「この〈営利企業衰退の理論〉も、つまりは、彼の進化論的理論とその方法にその根拠を有している」とエッセルは言う。もっとも、ヴェブレンは、正確な歴史の動向を予測することをためらった。しかし「彼は社会主義か国家主義的な軍国主義という二つの可能性に注意を向け」企業支配の体制は、そのいずれとも両立しがたい、と言う。営利企業の体制、つまり資本主義体制は、かくしていずれ衰退しざるをえない。ヴェブレンは企業の「廃止より退位が最もありえる変化の過程であると考えた」のである。

こうして、ヴェブレンの進化論的变化に関する理論内容の概要を整序し検討したエッセルは、当論文をこう結んでいる。「この論文のこれまでの関心は、次の見解を主張しかつそれを広めることにあった。すなわち、ヴェブレンの進化論的变化に関する一般理論は、彼が社会科学になした貢献の中心的かつ統一的局面である、という見解、また第二に、この理論が経済学と社会学とを統合することの相互に有利なことを立証しているという見解が、それである。この見解が展開されてきた理由はこうである。つまり、ヴェブレンがなした貢献の特定の諸局面を、各々の部分に形を与えている一般理論から切り離して論議することは、一般理論と特殊理論のいずれもが有する説明の価値及び地位をかなり減じるということ、またそれは、彼の作品の基本要素を誤って解釈させることにもなる、というのがそれである。」しかるに、そのヴェブレンの進化論的变化に関する一般理論はこれまで「受けるに値する注意が払われてこなかった」と。

(5)

以上、出来るだけエッセルに即し、順を追って彼のヴェブレンについての立論を見てきた。ヴェブレンを、マクロ経済社会学者と規定したエッセルは、その学問が進化論的变化に関する理論、つまりその一般理論と経済現象に関する特殊理

論からなることに注目し、前者が後者にその形を与えている、と解した。とすればまず、その一般理論 — ヴェブレン思想の正しい理解には、何よりその全体性における検討ないし評価が不可欠だというエッセルは、ここにまた、ヴェブレンの社会科学への独自の貢献も捜し求められるべきだということであった — の解明こそ、急務だということになるであろう。かくして初めて、ヴェブレンの特殊理論も正しく解釈され評価されることになるからである。ここにエッセルは、そのヴェブレンの進化論的变化に関する理論を整序し検討することを、自らの論文の主題としたのであった。

その出発点をヴェブレンの初期諸論文に求めたエッセルは、既にそこに、進化論的变化に関する理論の構築がヴェブレン生涯の研究課題として設定されていることを読みとった。同時にエッセルは、その課題を遂行する際の基本視角となるべき中心概念、つまり「製作本能」という概念をそこに剔抉し、更に論を進めつつ、ヴェブレンの進化論的变化に関する理論のテーマをも、明らかにしていた。すなわち、歴史的経済社会 — 経済的・文化的条件 — の変化の意味を、それが製作本能の発現に有利か否かという視点から解明ないし解釈すべく、その変化を各歴史段階において明らかにしていく、というのがそれであった。続けてエッセルは、ヴェブレンの技術、習慣及び制度という諸概念を検討し、それらが、本能の発現を規定し経済社会の進化をもたらす要因として、進化論的变化に関する理論の構築にとって、不可欠な概念であることを指摘していた。かくして、ヴェブレンの進化論的变化に関する理論の骨格を描き出したエッセルは、最後に、その理論内容の整序と検討に努めていた。エッセルによると、そこでのヴェブレンの主たる関心は、資本主義分析、とりわけその矛盾にあった。その矛盾と係わるヴェブレンの資本主義批判の論点を紹介しつつ、エッセルは、それがヴェブレンの初期諸論文に既に見られた分析視角に由来する首尾一貫した帰結に他ならないことを、きわめて説得的に論述していた。

もっとも本文中にも指摘したが、エッセルには、ヴェブレンが批判的に分析した近代資本主義が、彼の「株式会社勃興期」つまり独占資本主義段階に至ってのそれだとの認識が欠落していた。自由競争の産業資本主義段階を、生産の増大・製作本能の発現と企業目的・金銭的利潤の獲得とが一致した時代と解したヴェブ

レンには、産業と企業 — 従って産業的職業と金銭的職業 — の間に分離は認めても、その間に何んらの矛盾も対立も認めないのである。製作本能の発現に阻止的であるか否かを、各歴史的経済社会の評価基準としたヴェブレンが、その本能の発現が阻止されず、否むしろそれを促進した自由競争の産業資本主義に対して批判的となりえないことは、明らかであろう。つまりは製作本能の発現を阻止しざるをえない「企業的サボタージュ」に発する産業と企業の矛盾・対立は、そのサボタージュを必然化するヴェブレンの独占段階に至って、始めて現出する内容のものなのである（以上詳しくは、中山大『ヴェブレンの人と思想』ミネルバ書房、1974年、293頁参照）。エッセルが「近代資本主義についてのヴェブレンの研究の主たる焦点は、その矛盾にある」というその矛盾とは、他ならぬヴェブレンの独占資本主義段階におけるそれなのである。従ってまた、ヴェブレンの主たる関心は、決して資本主義一般の分析にあったのではなく、何より独占資本主義のそれにあつたのである。またエッセルが述べているように、確かにヴェブレンは、企業人を寄生的存在として糾弾した。しかしそれも、あくまで独占段階に至つての企業人を指してのことであつて、自由競争の産業資本主義段階における企業人は、生産効率を高めるべく進んで技術を導入しそれを改善改革した「産業の将士」として、きわめて高く評価されているのである（Veblen, *Absentee Ownership and Business Enterprise in Recent Times*, 1928, 油本訳、駒沢大学経済学論集、第3巻第3号、145頁参照）。

とまれヴェブレンの資本主義分析は、エッセルが指摘していたように、法律、政治及び教育等の諸領域にまで及ぶものであつた。かくしてエッセルは述べていた。「ヴェブレンの貢献のクライマックスは、企業と産業の習慣や制度間の矛盾に帰因させた機械時代の製作者気質の拒否から、社会的・経済的及び政治的諸分枝を理解しようとの関心にあつた。ヴェブレンは、何よりマルクスやウエーバーと並ぶ、近代産業資本主義に関する社会理論家である」と。かかる評価に異論はないが、この場合の資本主義とは、上述したように、何より独占段階に至つてのそれであることに注意しなければならない。この点の認識を欠いては、少なくとも、ヴェブレンの資本主義分析についての正しい評価は下せまい。そこで、エッセルにそくしてヴェブレンを評するならば、彼は、製作本能という彼独自の概念を中

心に、従って生産力的視点から、独占資本主義体制を、その文化諸領域にまで拡大して批判的に分析したマクロ経済社会学者であった、と言えるだろう。

最後に、このヴェブレンと彼がその創始者と一般にみなされてきた制度学派との関係について若干見ておきたい。エッセルが述べていたように、ヴェブレンの資本主義分析の焦点はその矛盾にあった。すなわち先に見た産業・機械過程と企業間の矛盾というのがそれである。この矛盾・対立は企業支配の体制 — 資本主義体制 — の衰退をやがては導かざるをえないもの、と解されていた。しかもこの帰結は、エッセルが指摘していたように、ヴェブレン思想の二大支柱ともいべき本能論と進化主義・思想に由来する必然的なものであった。ハリスによると「ヴェブレンの特徴は、この企業と機械過程から生じる習慣の矛盾が資本主義の没落を引き起こすことを提示したことにある。重要なことは、この特徴が、ヴェブレンの影響を受けたといわれる経済学者達のただ一人の研究書の中にも、見出されないということである」(A・L・Harris, *Types of Institutionalism*, in *Journal of Political Economy*, Vol. XL. Dec., 1932, p. 789)。とすれば、このヴェブレンを、J・R・コモンス、W・C・ミッチェル等いわゆる制度学派の人々と一括して取り扱うことは、困難だとは言えまいか。

またエッセルによると、「本能」論は、ヴェブレンの思想の中核をなし、彼の思想を統一あるものとなしているきわめて重要なものであった。特に「製作本能」という概念は、ヴェブレンが経済社会を分析する場合の基本視角をなし、彼が経済社会を評価する場合の一つの基準をなすものであった。しかるに、一般に制度主義者と呼ばれている人々は、その本能概念を思弁的かつ非科学的なものとして、ギャムズによると、「ヴェブレンの最も興味ある心理学的洞察を無視することによって葬ってしまった」(J・S・Gambas, *Beyond Supply and Demand*, 1946, p. 76) ののである。このことは、「ヴェブレンの基本的思想を否定」したことを意味する。かくして中山氏は言う。それ故に「ヴェブレン、コモンスおよびミッチェルを制度学派として取り扱うことは困難であり、従来のように制度学派として一括することは、ヴェブレンの思想体系の基本的要素を無視することによって制度学派の内容を無意味なものとなすであろう」(中山大、上掲書、113 — 114頁)と。なお附言すれば、確かにヴェブレンに続く制度学派と呼ばれる一

群の人々が、ヴェブレンの本能論を否定し、それに代えて統計的・実証的・数理的的手法を用いることによって、自らの理論を精密化、この意味で科学化したことは事実であろう。しかし、数量的処理が重んじられることから技術的に精緻になったはんめん、批判の精神と広範な視野が見すてられたことも否定は出来まい。直接ヴェブレンに関してではないが、清水氏の次の評言に注目しておきたい。

「私には精緻な技術の背後に、古い社会心理学の、あの文明批判的な視野と野心とが生きていることが望ましい」（清水幾太郎『社会心理学』岩波全書、1963年、228頁）。

< 1976年10月了 >